

## 『キネマ旬報』の香櫨園時代

笹川慶子

『キネマ旬報』は東京で創刊された雑誌であるがゆえに関西とのかかわりなどまったくないかのように思われがちだ。しかし、そうではない。関西との関係は創刊者のひとり田中三郎が大阪市内道修町あたりの化学薬品輸入会社・芝川商店に就職したというのもあるが、じつはもっと深い。というのも1923(大正12)年11月21日号から約4年にわたり『キネマ旬報』は関西で発行されていたからだ。関東大震災で東京が壊滅状態になったとき、雑誌の復興をめざす田中は本社を東京の今井町から兵庫県の香櫨園駅近くにある木造一軒家に移し、ここで編集を始める。



震災後復活記念号の表紙。兵庫県武庫郡西宮町川尻2611と記載されている(『キネマ旬報』1923年11月21日号 © キネマ旬報社)

この香櫨園の一軒家は、まるで映画至上宗教の総本山のような場所になっていたようだ<sup>i</sup>。映画を愛する二十歳そこそこの若い同人たちがつどい、監督やスターなど業界人も昼夜を問わず自由に入出入りし、語り合う。東京の同人宛に送った手紙の中で田中は香櫨園での生活を「情け豊か、熱あり、歌あり、涙あり、ああ地上の

樂園」と綴っている<sup>ii</sup>。

……香櫨園時代は青春の坩堝だった。阪神電車の香櫨園駅で下車、夙川堤を松並木伝いに浜に向かつて約一丁、左にだらだらと下る小径がある。そこを下りて凡そ又一丁ほど行くと、右側の古めかしい門に「キネマ旬報社」の看板をかけた二階家が彼等の梁山泊であつた。五、六人から時には二十人あまりの若者があつまることもあるが、とにかくあまり金のありそうにも思われぬ連中のくせに、出入り商人からの買物は華手で鷹揚だ。近所の者はこの家を「キネマはん」と呼んでいた。

この家に巢喰つているのは…田中、田村、山路、平尾の四人の他に食客として石川俊彦。夜ともなれば、何処ともなくこれらむくつけき若者の友人知人のあつまり来つて談論風発、疲れるとそのまゝ泊まりこんで、翌朝帰つて行く。勝手もとには食パン、リプトンの紅茶、MJB コーヒー、バターの類を年中切らすことなく貯えてあり、階下八畳の間は万年床が敷いてある。だから腹がへつたら勝手もとへ行つて好きなものを食べればいいし、ねむくなつたら万年床にもぐればいい。二階座敷にはブランスウィックの蓄音機がすえられてあつて、チャップリンの作曲したというジャズ・レコードをくりかえしかけては味わう。(中略)

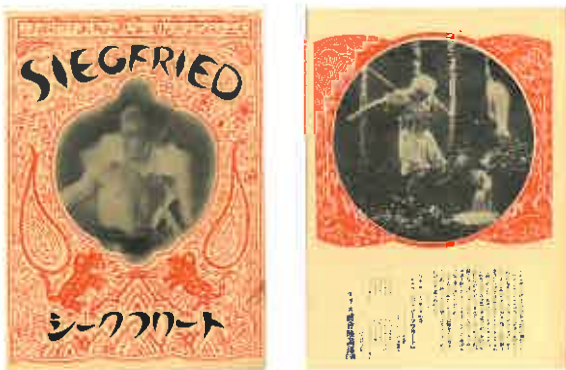
程近き甲陽よりは未来の名監督山本嘉次郎が……夜な夜なあらわれるかと思えば、須田鐘太、鈴木俊夫(ユナイテッド・アーチストスの宣伝部長……)なども出沒する。谷幹一、岡田時彦、岡田嘉子もやつて来る。にぎやかなこと、この上なしだ。

学期末ともなれば東京側の当時まだ学生だつた古川緑波、岩崎昶、岡崎真砂雄、内田岐三雄、飯島正、清水千代太たちが押しかけて来るし……如月敏は海水浴場のカルピス・ガールに想いを焦がし、ついにカル

ピスを飲みすぎて腹をこわしたし、緑波は三郎が買いにやつた鯖ずしをペロリと何人前か平らげ、夙川土手の洋食屋のビフテキパイに舌鼓をうち、谷崎潤一郎先生を訪れ、感激の極、雨の中を岡本から跣足で帰つたりしたものである<sup>iii</sup>。

東京からやってきたキネマを愛する若者と、これまたキネマを心から愛する関西の若者が夜の更けるのも忘れて夢中で話し合う、この青春真っ只中の、自由奔放で、渾然たる理想郷が『キネマ旬報』を飛躍させる大きな力となったのだろう。

じっさい、この香櫨園時代を境として『キネマ旬報』は映画ファン雑誌から業界誌へと変貌を遂げる。その象徴が『キネマ旬報』の名物となる三色刷りの折込チラシである。この折込チラシは大阪のイリス商会が、ドイツの名匠フリッツ・ラング監督の『ニーベルンゲン』*Die Nibelungen* (1924) やMGM社の『ロモラ』*Romola* (1924) など輸入映画の宣伝用に始めたのが最初である。ときには役者絵のような色使いの現代劇映画のチラシ、ときには構成主義のような時代劇映画のチラシというように、古い感覚と新しい感覚が混ざりあった広告デザインは関西に花ひらいた昭和モダニズムの色香を現在に伝えている。この折込チラシが業界で評判になり、同誌に広告の掲載を希望する会社が急増する。それとともに情報も充実し、冊子はどんどん厚くなり、発行部数もめきめき増えていった。こうして『キネマ旬報』は業界随一の大雑誌へと成長していくのである。



イリス商会映画部提供の『ニーベルンゲン』折込チラシ  
（『キネマ旬報』1925年1月1日号 © キネマ旬報社）

ほとんど知られていないが、『キネマ旬報』にとってこの香櫨園時代が重要な転換期であったことは確かである。震災直後、資本やモノ、

人の流れは一変し、日本映画界の中心は完全に東から西へと移ってしまう。日活は向島撮影所を閉鎖して俳優全部を京都に移し、松竹も東京営業部以外の事務機能をすべて大阪支社に移して京都に下加茂撮影所を建設する。大阪を拠点とする帝国キネマ演芸（帝キネ）は巣鴨撮影所を閉鎖し、伊藤大輔ら巣鴨派を小阪と芦屋の撮影所に移動させ、なんと月14本もの映画を乱造し始める。さらにユニヴァーサル、パラマウント、ユナイテッド・アーティスツ、フォックスといったハリウッドの日本支社も大阪や神戸に引っ越し、他方、神戸のスター・フィルムや大阪のイリス商会など地元の配給会社は好景気の波によって勢いを増す。田中三郎が『キネマ旬報』の復興の地としてほかでもない大阪と神戸の真ん中に位置する香櫨園を選んだのは、こういった関西圏の経済的、文化的な動向を見極めてのことだったのだろう。関東と関西に分散していた映画関連会社がいっときとはいえ関西に集中し、新時代の気運が澎湃する中で、『キネマ旬報』もその気運にうまくのって方向転換を果たし、躍進したといえよう。

1927（昭和2）年、香櫨園の人々に「キネマはん」と呼ばれていた『キネマ旬報』の同人たちは復興した東京に戻っていく。その直前、『キネマ旬報』は株式会社となり、田中はわずか28歳で取締役役に就任する。キネマの同人が香櫨園で過ごした4年間は『キネマ旬報』が映画雑誌として、また組織として成熟するための有意義な時間だったといえよう。やがて若き同人たちは年を重ね、香櫨園での日々を懐かしむようになる。古川緑波はいう「ああ夢なりき。夢なりき。あんな時世はもう来ない」。香櫨園の一軒家はキネマの同人たちにとって、そして『キネマ旬報』という雑誌にとっても、まさに魅惑的な青春の坩堝だったのである。

i キネマ旬報同人社友語「終刊号に寄せて」『キネマ旬報』1940年12月1日号、91-104、154頁。

ii 岸松雄「現代日本映画人伝(6) 田中三郎(改メ清卿)」『映画評論』1954年3月号、71頁。

iii 同上、71-72頁。甲陽とは東亜キネマ甲陽撮影所のこと。山本嘉次郎は関西で監督デビューを果たし、のちに東宝でエノケン映画を数多く監督、黒澤明の師匠でもある。谷幹一や岡田時彦、岡田嘉子は人気俳優。古川緑波以下の名前は『キネマ旬報』の同人で、彼らが日本の映画研究の第一世代となる。